

2025. 8. 17 (日) 使徒25：1～12

- 25:1 フェストゥスは、属州に到着すると、三日後にカイサリアからエルサレムに上った。
- 25:2 すると、祭司長たちとユダヤ人のおもだった者たちが、パウロのことを告訴した。
- 25:3 そして、パウロの件で自分たちに好意を示し、彼をエルサレムに呼び寄せていただきたいと、フェストゥスに懇願した。待ち伏せして、途中でパウロを殺そうとしていたのである。
- 25:4 しかしフェストゥスは、パウロはカイサリアに監禁されているし、自分も間もなく出発する予定であると答え、
- 25:5 「その男に何か問題があるなら、おまえたちの中の有力者たちが私と一緒に下って行って、彼を訴えればよい」と言った。
- 25:6 フェストゥスは、彼らのところに八日か十日ほど滞在しただけで、カイサリアに下り、翌日、裁判の席に着いて、パウロの出廷を命じた。
- 25:7 パウロが現れると、エルサレムから下って来たユダヤ人たちは彼を取り囲んで立ち、多くの重い罪状を申し立てた。しかし、それを立証することはできなかった。
- 25:8 パウロは、「私は、ユダヤ人の律法に対しても、宮に対しても、カエサルに対しても、何の罪も犯してはいません」と弁明した。
- 25:9 ところが、ユダヤ人たちの機嫌を取ろうとしたフェストゥスは、パウロに向かって、「おまえはエルサレムに上り、そこでこれらの件について、私の前で裁判を受けることを望むか」と尋ねた。
- 25:10 すると、パウロは言った。「私はカエサルの法廷に立っているのですから、ここで裁判を受けるのが当然です。閣下もよくご存じのとおり、私はユダヤ人たちに何も悪いことをしていません。
- 25:11 もし私が悪いことをし、死に値する何かをしたのなら、私は死を免れようとは思いません。しかし、この人たちが訴えていることに何の根拠もないとすれば、だれも私を彼らに引き渡すことはできません。私はカエサルに上訴します。」
- 25:12 そこで、フェストゥスは陪席の者たちと協議したうえで、こう答えた。「おまえはカエサルに上訴したのだから、カエサルのもとに行くことになる。」

#### <説教>

使徒パウロはカイサリアにいました。そこで総督フェリクスによる裁判を受けるためでした。その裁判は 24 章に記されていたように、エルサレムにいた大祭司その他のユダヤ人たちによって訴えられ、起こされたものでした。彼らは頑なにイエス・キリストを信ぜず、イエス・キリストの福音を宣べ伝えていたパウロに反対し、なんとかパウロを亡き者にしようとして総督フェリクスに告訴しました。フェリクスはユダヤ人たちとパウロ双方の言い分を聞きましたが、判決を出すことなく、裁判を延期しました(24:22)。パウロはある程度の自由を与えられながら(有罪とは確定されておらず、またローマ市民権を持っていることも考慮されたのでしょうか)監禁されることになりました(23)。そのまま二年が過ぎ、フェリクスに代わってポルキウス・フェストゥスがユダヤ州の総督としてローマ皇帝カエサルによって任命されましたが、パウロは監禁されたままでした(27)。

新米の総督フェストゥスは属州（ユダヤ）に到着すると三日後に駐在地カイサリアからエルサレムに行きました(25:1)。ユダヤ人たち指導者たちと直接話をしてユダヤ人たちの要望などを知るためだったと考えられます。

それで、祭司長たちとユダヤ人たちのおもだった者たちが早速パウロのことをフェストゥスに告訴しました(2)。もちろん24章に記されていたのと同じ内容のことを訴えたのでしょう。そして〈パウロの件で自分たちに好意を示し、彼をエルサレムに呼び寄せていただきたいと、フェストゥスに懇願し〉ました。表向きはエルサレムで裁判をしてほしいということだったのでしょうが、彼らの本当の目的は、〈待ち伏せして、途中でパウロを殺そう〉ということでした(3)。同じような陰謀は以前にも企てられ、しかし外部に洩れて計画倒れになっていたことでした(23章)。しかし彼らは執念深く、決して諦めませんでした。もっとも、既に「使徒の働き」で見て来たように、パウロに対するユダヤ人たちの「陰謀」は、パウロがバリバリのパリサイ派、キリスト者への大迫害者から一転「キリストの証人」へと変えられ、イエス・キリストの福音を宣べ伝え始めた直後からありました。しかし、その度に彼のいのちは守られました(9:23-25。14:5-6,19-20。20:3など)。また、そんなユダヤ人たちによる陰謀の他にも、エペソなどでの異邦人たちによる騒ぎなど、多くのいのちの危険にパウロは直面していました。しかしやはりその度にパウロのいのちは守られました。もちろんそれは神、主イエス・キリストの助け、恵みによることでした。なぜそうやってパウロのいのちは守られ生かされて来たのでしょうか。その大きな理由の一つが今や主によってパウロに明らかにされていました。それはつまり「ローマでもイエス・キリストの証しをする」ためということでした(23:11)。

そういう神の助け守りのために、神は人間をお用いになって来たことも「使徒の働き」で見て来ました。その人間はパウロの弟子たち、仲間たちのときもありましたが、パウロとは何の関係もない、その土地の町の役人とかそういう人のことも多かったことでした。そして二年前からこれまでも、千人隊長クラウディウス・リシア、総督フェリクスといったローマ帝国の役人を神はお用いになって来ました、続く総督フェストゥスもお用いになりました(4-5)。もちろんフェストゥスはただ自分の仕事をローマの法律と自分の道理に従って果たしただけで、真の神、イエス・キリストへの信仰によったものではありません。しかし彼はここで極めて普通に、常識的に、忠実に「悪を罰し、善を奨励して、世の中の秩序を守る」という自分の職務を執行しました。こうしてフェストゥスは自分では知らないうちに、「神によって立てられた、神のしもべ」(ローマ 13:1-4)としての働きをすることになりました。

フェストゥスはユダヤ人たちの企てに乗ることなく、いわば粛々と、そしててきぱきと自分の仕事をします。カイサリアに戻ると直ぐにパウロの裁判の法廷を開きました(6)。ユダヤ人たちはパウロについての〈多くの重い罪状を申し立て〉ました(7)。その内容は既にフェリクスの法廷で述べたことと同じことだったでしょう。そして更には前よりもっとはっきりとパウロがローマ帝国の法律を犯していて、ローマ帝国と皇帝(カエサル)にとって危険な人物だと訴えたのかもしれませんが、しかし、彼らはその証拠を示すことができず、よって自分たちの訴えが正しいと明らかにすることができませんでした(7)。

それに対してパウロは、「私は、ユダヤ人の律法に対しても、宮に対しても、カエサルに対しても、何の罪も犯してはいません」と、はっきりと弁明しました(8)。原告(ユダ

ヤ人たちが訴えた〈多くの重い罪状〉が立証されず、被告（パウロ）もそれらを全面的に否定したことで、裁判官であるフェストゥスはパウロに有罪判決を下すことはできないと判断したと思われます。とすればそれは「神の前にも人の前にも」正しい判断でした。

しかしそんなフェストゥスにも世の権力者としての常（つね）と言うべき弱点がありました。いやそれは人間なら誰もが持っているものだとも言えます。それは「人から嫌われない。人から良く思われたい」という願望です。一応は自分が裁判長を務めはするが、場所をエルサレムに変えて、ユダヤ人たちの手に引き渡されて裁判を受けることを望むか、とパウロに尋ねました(9)。本当は自分がユダヤ人たちの機嫌を取ろうと望んだのに、それを表にしてはユダヤ人たちの上に立つ権力者としては面子（めんつ）が潰れると思ったのでしょう。それで被告人が望んだことにして体面を保とうとしたのでしょう。

しかしパウロはそんな「腰砕け」ではありませんでした。「神の前にも人の前にも」筋（すじ）を通しました(10-11)。自分は既にローマ皇帝から任命された総督の法廷に立っている、それは即ち〈カエサル（カエサル）の法廷に立っている〉のだから〈ここで裁判を受けるのが当然〉だと言い、ユダヤ人たちに何も悪いことをしていないのだからエルサレムに戻ってユダヤ人たちに引き渡される必要はないと答えました。そして更に、総督の裁判に不服があるなら文字通りローマに行ってローマ皇帝に訴えることができるという「ローマ市民」としての権利をも賢く、正しく行使したのです。

それに対してフェストゥスは反論することができず、パウロの主張を認めざるを得ませんでした(12)。

このようにパウロがローマ皇帝に上訴したのは、何よりも「あなたは…ローマでも証しをしなければならない」との主のみことば、みこころ、命令、約束に信頼し、従ったからです。そして主のみことば、みこころにかなう限り、反しない限り、当時のローマ帝国の法律にも従っていたからです。それ故に、ユダヤ人であれ、総督であれ、ローマ皇帝であれ、人の機嫌を取ろうとはしませんでした。ただ神に喜ばれようと心を砕いていたのです。このパウロの信仰は、かつての日本の戦争の時代、「キリスト教、教会は世の中で嫌われているから、進んで戦争に協力しよう」と言って、天皇崇拜をし、神社参拝をし、戦争に協力した日本の教会の精神とは正反対です。そして今もなお同じ弱さをかかえているに違いない現代の私たちに対する大きな挑戦として今日も示されています。